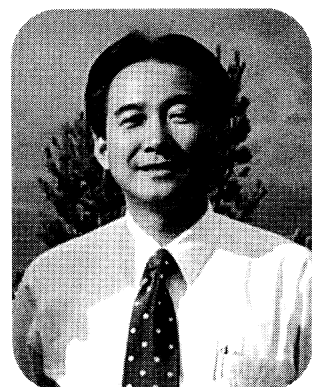


# ノルウェーの ナーシングホーム

月間福祉環境  
2001.3

東京都立保健科学大学 作業療法学科 木之瀬 隆

ブレッケストーレンよりフィヨルドを望む▲



木之瀬 隆氏

ノルウェー視察の中でナーシングホームをニカ所訪問した。ナーシングホームは日本の特別養護老人ホーム（以下、特養と略す）にあたるが、施設のあり方は日本とは大きく異なる。また、個人用の福祉用具はテクニカルエイドセンター（以下、TACと略す）からレンタルされ入所者の自立的生活に配慮されている。また、労働環境の安全確保に福祉用具が積極的に導入されていた。日本の特養は介護保険サービスの一つになったことで以前より質の低下が問題となっており、福祉用具の位置づけを明確にすることで打開策のヒントとしたい。

## ノルウェーの ナーシングホーム

ノルウェーは一九九四年から在宅生活を支援する福祉へ移行してきたが、

自宅でホームヘルプサービスや福祉用具の支援でも一人暮らしの難しいケースや、一人暮らしに不安のある高齢者は自分の意志で入所を選ぶことができる。施設のあり方は変革の時期にあり、新しい施設は入所者数の小さい単位で運営し、居室も1ベッドルームから2ルームへの検討がされつつある。

オスロ市内にあるサーゲネ・ホームはサーゲネ教会が母体となっているナーシングホームである。教員がボランティアとして積極的に運営に関わっている素晴らしい施設であった。一四人の入所者に対して二名のケアワーカーがいる。看護部門に看護婦、OT、PTがおり、それと事務職員がいる。居室の管理セクションは七つに分けられ、五つは一般の居室群である。一つは痴呆専用、一つはショートステイ用である。デイサービスの利用者は一日一五人である。入所者の内訳は、七割が虚弱老人で痴呆のあるものも含まれ、三割が車いす使用の障害者である。

福祉用具の説明はOTのキルステンさん達が説明してくれた。施設用品となるベッド関係やリフター、立ち上がりやリクライニング機能の電

動のティルトチェア等は、施設がそろえている。個人用の福祉用具である、車いす、歩行器、補聴器やコミュニケーション類は、セラピストが入所者の身体機能等を評価し、テクニカルエイドセンターに依頼し、レンタルされるシステムになっている。利用者が入所時に自宅から持ち込む家具は居室に置く椅子とテーブル、チェストが基本である（図1）。ベッドは介護用ベッドを使用するため一般のベッドは持ち込めない。自分のお気に入りの家具を少ないながらも持ち込めることは、自宅のベッド



図1...居室の椅子、テーブル、歩行器等

ルームがそのまま施設へ移動し、住所が変わっただけと表現される。車いすでは使用者全員がモジュラー車いすで体型や操作能力に合わせたタイプに乗っていた。もちろん、日本のように身体に合わない車いすに無理やり座らされ抑制帯で拘束されている入所者はいない。コンフォートタイプといわれる座位保持機能付モジュラー車いすも重度者は使用していた(図2)。しかしOTの説明では適合評価を詳細に行って申請をしないと簡単にはレンタルされないといいことであつた。また、身体機能の変化により、TACに連絡をとり、



図2…座位保持機能付き車いすに乗ったお年寄り(中央後筆者)

図3…簡易リフトにてトランスファー介助



車いすを変更することであつた。

次に、施設職員が使用する福祉用具として移乗機器が重要な役割をしていた。日中はほとんどの入所者が離床してデイルーム等にいるが、トイレへの移乗や椅子への移乗を適宜おこなうことで長い離床時間が確保されている。移乗の負担はケアワーカーには大変大きい。移乗機器がその負担を軽減している(図3)。このタイプの移乗用具は本人の身体機能の一部を活用して移乗すること、機能維持の目的を合わせ持っている。ノルウェーではケアワーカーの安全確保として腰痛予防は徹底していた。

## 日本の特別養護老人ホームとの比較

特養で福祉用具の話をする機会があると、いつも職員の方々に自分の働く施設に将来、入所したいと思えますかという質問をする。すると、全員が特養には入所したくないという返事が返ってくる。残念なことであるが、特養の職員が誇りを持って働ける現状にはない。また、入所者については本人の意思とは関係なく家族が決める社会的入所がほとんどである。介護保険ではサービス選択肢の一つとして特養が位置づけられているが、在宅生活と比較して入所を考えるのでなく、あきらめて入るところとなっている。

介護保険では車いす等の福祉用具は施設の備品として扱われ、普通型車いすに体型や障害に関係なく入所者は座らされている。特養の入所者にも福祉用具がレンタルされることで、車いす上での身体拘束や施設の負担は軽減される。また、人的介護で慢性的に腰痛に悩まされるケアワーカーは、腰痛予防用のベルトと合わせて移乗機器を導入する必要がある。工場などの労働環境の安全管理と比べると、介護福祉環境での腰痛

予防等の安全管理は劣悪である。EU諸国では職場環境の安全管理として人が持ち上げられる最大重量を20kgとするガイドラインがある。実際に二人の人間で障害者を抱えたり運んだりする場合は、最大40kgまでとなる。それを補うのが移乗機器であり、労働環境の安全と腰痛予防は新しい厚生労働省の急務である。

### ◆終わりに

サーゲネ・ホームの次なる目標は、現在の大きな施設でなく、自分たちのコミュニティに自宅のような形式のグループホームをいくつか造り、そこに自分たちが入りたいということであつた。私も将来自分が入りたいグループホームの夢はあるが、もうすぐ実現するサーゲネの私たちをみると羨ましくなつた。日本でそのようなグループホームが作れなかった時は、ここに入りたと言ったら「どうぞいらしてください」という返事が返ってきた。